

国際レジャー博とウォーターフロント



国際レジャー博覧会協会常務理事
東京農業大学教授

平野侃三

水の都という運河を張りめぐらせた港湾都市を思い浮かべるのが普通であろう。ブリスベンはそのような都市ではない。何となく川の都といふたくなる都市である。蛇行するブリスベン川の両岸にまたがって発展したブリスベン市は、どこを歩いても川に行き当たる。もちろん、人口110万人の都市であり、新しく発展した市街地は、ブリスベン川から遠く離れた地もあるが、景観的にも、又、この都市の心のシンボルとしてもブリスベン川が大きな軸となっていることに変わりはない。

オーストラリアの建国200年記念事業の一環として開催されている国際レジャー博覧会が、ブリスベン川に沿った都心の極めて恵まれた場所であるのも、ブリスベン川を軸線としてさらに強調したいという市の意向が明らかに読みとれる。

ブリスベン川は、レジャー博の会場附近を除くと殆んど人工的護岸が目立たない。主な部分は公園として整備され、緑が水に映えて素晴らしい景色である。都心にある植物園は1828年の設立というから、都市の発展とともにあったわけである。川に接し、高層建築を受け止めるにふさわしい緑のマスとなっている。

一見、都市内に恣意的に分散配置されているブリスベン市の公園計画は、よく見るとブリスベン川やその支川、平行して流れる小河川に沿って系統的に配置されていること

がわかる。蛇行するブリスベン川については、特に凸部に重点を置いて計画されている。公園のみでなく、大学、ゴルフ場等の緑の多い施設が景観上重要なポイントをしめて、川の都の印象をより高めている。

ボートに、散策に、サイクリングに、川に沿っていろいろなレクリエーションが展開されている。公園にはオーストラリア人が最も好むバーベキュー・パーティのセットが備えつけてある。明るい太陽の下、都心に近いところでのんびりとした屋外生活を楽しめるブリスベン市民の豊かさは、ブリスベン川の自然を愛し、その環境を積極的に保全



係留された屋形船

し、利用してきた先人の知恵の賜であるといえよう。

国際レジャー博覧会は4月30日に開催された。わが国は2,200平方メートルの展示館とその前面に1,200平方メートルの日本庭園を、更にブリスベン川に屋形舟を係留することとしている。日本館ではオーストラリア建国の頃の日本のレクリエーション事情を紹介するとともに、現代に生きる伝統と、今日の日本の新しいレクリエーションの流れを、ハイビジョン等の高度な展示技術を駆使して表現している。これにハイビジョン前面のステージで演ぜられる色々な催しとを結びつけて、より効果的な演出を行っている。

日本館を出ると日本庭園の入口がある。竹下総理の筆になる“遊翠園”の偏額の下をくぐると、眼の前に庭園の池と亭が現れる。レジャー博は通常の博覧会と異なり、催し物も本来的な目的物となっているため、伝統芸能を演ずる亭は、通常のバランスよりは少し大きめに造られている。生花等の展示やお茶の実演のための場も造られ、日本情緒を盛り上げている。

開会以来殆んど連日2万人を超える入場者で一杯であり、

来場者総数の30%弱が日本館、日本庭園を訪れている。7月8日のジャパンデイを挟んで一週間開催された。ジャパウィークには、色々な催し物が会場内外で展開され、ブリスベンの街が日本色一色にぬりつぶされた。しかし、ブリスベン川に映る花火は日本の物であっても、ブリスベン川を就航する船からの景色は、とても日本では真似の出来ない素晴らしい河川景観であることを思いしらせた。



日本館オープニングセレモニー



レジャー博会場とブリスベン川